



〈著者略歴〉

塚越和夫（つかこし かずお）

昭和6年（1931）東京生まれ。昭和32年早稲田大学大学院修士課程修了。都立高校教諭を経て、現在、早大高等学院教諭。主要論考に、「野村英夫論」（「転換期の詩人たち」芳賀書店、昭和44年4月）「人間失格論」（「批評と研究・太宰治」芳賀書店、昭和47年4月）「玄鶴山房・河童」（「批評と研究・芥川龍之介」芳賀書店、昭和47年7月）「パンドラの匣」（「作品論・大宰治」双文社、昭和49年6月）「田中英光論」（「無頼派の文学」教育出版センター、昭和49年8月）「無頼派の文学」（「昭和文学の諸問題」笠間書院、昭和54年5月）等がある。



〈検印省略〉

明治文学石摺考

定価2800円

昭和56年10月25日初版第1刷印刷
昭和56年11月16日初版第1刷発行

著者 塚越和夫

編集者 白根孝美

発行所 葦真文社

郵便番号171

東京都豊島区長崎4-46-14

電話東京(03)972-7952

振替口座 東京 1-70574

本書の一部または全部を無断で複写複製（コピー）することは著作権者および出版者の権利の侵害になりますので、あらかじめ小社あて許諾をお求めください。

印刷製本・慶昌堂印刷株式会社

© Kazuo Tsukakoshi 1981

Printed in Japan

（落丁本・乱丁本はお取り替えします）

(0183) ISBN4-900057-11-8 C0095 ¥2800E



明治文学石摺考

塚越
和夫

葦真文社

まえがき

明治は遠くなり、その文学は古典と化し、現在刊行される諸本には、場合によって詳細な注釈が付せられ、文語体の小説になると口語訳が出る状況である。時の流れは誰にも止められず、特に風俗はすぐに古びるのだから、それを咎めること自体無意味であろう。

たとえば、今の若者が明治文学にそっぽを向いたとしても、それは仕方のないことなので、学校で強制的に読まされるか、あるいは奇特な人が研究の対象にするのでなければ、二葉亭や透谷でさえ知らずに過ごすのが常態なのではなからうか。

もとより、私もまた明治を直接知る者ではない。それは、祖父の時代であり、せいぜい父の時代である。にもかかわらず、私にとって明治は遠く感ぜられず、その文学は、単なる冷たい研究対象ではない。

その理由は、ごく単純である。ものごろのついた頃は、太平洋戦争のさなかで、本がひどく欠乏しており、ほかに娯楽もなかったので、改造社の円本や春陽堂のそれに読み耽ったためである。したがって、その可否はとにかく、私は、明治文学を同時代の文学のごとくに錯覚し、それに溺れられたのだ。

明治時代は、近代国家の成立期であり、資本主義の興隆期であった。同時に、そこに生じた矛

盾に着目し、やがて社会主義思想に発展する下地がすでに形成されつつあった。いかなる時代にも、すぐれた頭脳は存在するものだが、かかる状況のもとでは、特にそれが顕著になるのである。

時代の様相を洞察し、その弱点を鋭く看破して、未来に対する的確な見通しを持つ巨人が輩出した。本書でささやかに触れた三宅雪嶺をその一人に数えることは妥当なことだと思う。世は挙げて政治の季節であり、それは間もなく帝国主義、ミリタリズムへと走って行った。

多くの知識人は、バスに乗り遅れまいと左顧右眄した。しかし、最近流行のレスター・カー・サロー氏の『ゼロ・サム社会』を真似るわけではないが、一方で得をする人間がいれば、必ず一方で損をする人間がいるものだ。福地桜痴は、バスに乗りかかって転落した極端な例である。また他方、スタートから時流に乗ることをあきらめ、暗いニヒリズムに、デカダンスに陥った人々もいる。広津柳浪は、そのよき見本である。

さらに、後に世をすねて、反俗のポーズを取りつづけた永井荷風のような人もあれば、旧時代の規範によりかきながら新時代を皮肉った斎藤緑雨のような人もある。実社会に対する関心が皆無ではないものの、この世ならぬ仮構の世界の構築に生涯を賭けたのは泉鏡花である。文壇に覇をとなえたために、かえって後代から攻撃の格好の目標にされた尾崎紅葉の例もある。本書で取扱った人々の大部分は、なんらかのかたちで不幸を背負っていた。

明治は、一面、実に幸運な時代だった。国家は、自国を守る危機感で緊張し、あげくは、領土

の拡張に腐心していればよかった。個人は、立身出世に専念し、それが美徳とされていた。公教育は、これらの路線にそい、一貫した価値観を持つことができた。むろん、それを批判する声はあったものの、大勢を覆すには至らなかった。

しかし、見方を変えれば、明治は、後代の不運を内部にすでに孕んでいた。否、この新時代は、新時代であるが故の発展途上の活気の裏に、爛熟した前代の江戸文化から見れば、極めて蕪雑な側面と陰惨な底辺とに支えられた不幸な時代でもあった。

例外はあるが、私が本書で取上げた作家・作品は、おおむね明治時代の陰面である。そこには、むろん私の個人的な嗜好が働いている。同時に、明治という時代の不幸をあえて貧しい感想の中に書きとめておこうとする、かなり積極的な私の意志があることを記して、本書の「まえがき」とし、本書の意図を明らかにしておくものである。

まえがき

広津柳浪

- ま え が き (3)
- (一) 作家としての出発 (11)
外部からの要因 (11) / 零落士族の面目 (18) / 文学への恥ら
い (24)
- (二) 男女同権論と女権小説 (29)
ミルの影響 (29) / 女権小説の盛行と後退 (37)
- (三) 硯友社と柳浪 (56)
深刻・観念小説の流行 (56) / 救いのない仮構の世界へ (62) / 合
理主義への警鐘 (70)
- (四) 「落椿」と「おのが罪」 (85)
作品に具現された「私」 (85) / 全存在を賭けた「落椿」 (88) / 作
家観を完成した「おのが罪」 (99) / 作品より「我」を脱ぐ (108)
- (五) 「変目伝」の成立 (119)
巧みな心理描写 (119) / 道義感との調和 (129)
- (六) 「黒蜥蜴」について (143)
- (七) 「今戸心中」と狭斜小説 (148)
荷風への影響 (148) / 主観を没した叙景 (154) / 冷徹な散文世界

へ (159)

斎藤緑雨

(169)

己れをも厳しく諷刺 (171) / 戯作こそ作家の本質 (180) / 笑いの文学 (186) / 非日常性の美意識 (190) / 無償の反逆精神 (195)

永井荷風

(201)

(一) ゴライズムの時代

(203)

猥褻とポルノの接点 (203) / ゴラとの訣別 (210) / 初期作品の瀆神性 (215)

(二) 「夢の女」について

(231)

緊密な完成度示す (231) / 家族主義への批判 (232) / 狭斜小説の影響 (236) / 明治の終焉と批評の眼 (239) / 卑小な美の追求へ (242) / 荷風美学の世界 (248)

鏡花の「外科室」

(256)

紅葉の「多情多恨」

(261)

桜痴ノート

(266)

雪嶺覚え書

(278)

あとがき

(283)

広
津
柳
浪

(一) 作家としての出発

外部からの要因

柳浪には、小説家になるいきさつを記した文章が三つある。まだ、あるかも知れないが、寡聞にして知らない。しかし、記述に精粗の差はあるけれども、くいちがいはないから、三つで沢山だろう。

- (1) 「小説界に入れる由来」(「新小説」明治三十四年一月号)
- (2) 「柳浪叢書」序文(明治四十二年)
- (3) 「過去の事ども」(「時事新報」大正十三年七月二日、六日)

以下、右の三文をもとにして、柳浪について考えてみようと思う。

明治二十年四月二十五日、身を落して働くつもりで上州に出かけた柳浪は、思うような仕事が見つからず、けれども、再び館林に戻る予定で、一時、帰京した。この四月二十五日という月日は、(1)によれば、月は違っても、二十五日に母が死んでいるのだという感慨を柳浪が洩らしているから正確なものだと思う。東京へ帰った柳浪は、池の端の友人・山内愚仙を訪れた。そして、

山内の勧めで小説を書くことになるのだが、その間の事情を(1)から引用してみよう。

さうすると山内やまのうちの言ふには、ソレは馬鹿な話だ、君筆を執つてからに、小説を書いたら宜いではないか、斯しかう云ふ話である、ソレは何ぜにさう云ふかと言へば、曾て私が二三枚のちよい／＼したものを書いて、山内に見せことがある、けれども自分はさう認めて居らなかつた、吾々が小説を書いた所が金になる所の話でなし、出してくれることさへ六ヶ敷からう、吾々が小説を書いた所が逆さかも仕方がないと言つた所が、マアソんなことを言はずに、兎うに角も書いて見せる、併ひよし私は書いたこともなし、到底可いけまいと言つた、所が山内は東京絵入新聞に、自分の知つて居る奴があるから、ソコへ持つて往つて見せるからして、兎も角も書けと云ふので、ソレから書いた、——中略——儲もちてさうなつて見ると、幾ら位に買つて呉れるだらうと云ふやうな相談をして居つた、まア二十銭か三十銭位のものだらう、三十銭呉れゝば月に九円である、さうすると飯位食つて往けると云ふやうな話なのである、さうすると、翌日向うから来て言ふのに、本屋を問合せた所が、一行二十字詰一枚が四十銭位である、四枚位として一元六十銭上げなければならぬけれども、新聞のことだから、さう云ふ割には上げられない、どうか其半分七十五銭で書いて呉れないか、斯う云ふ話である、実は七十五銭と云ふのは意外の話で、どうも能く酷ひどい原稿を買ふものだと言ふて話をして居つた位である、ソコでソレならば早速書きませうと云ふ訳になつた、さうすると月に二十円ばかり

の金が入る訳になった、ソレが抑々私が小説を書くに至つた濫觴である、其時に書いたのが、「女子参政屢中樓」と云ふ小説であつた。——中略——其内に今の尾崎君や何かと懇意になつて、「殘菊」を書くとか色々して、到頭小説で以て飯を食ふやうなことになつて来た、

文章が談話体なのは口述筆記のためである。なお、原文には総ルビがふつてあるが、煩わしいのでほとんど省略した。以下、引用文には、一部を除いてルビを省略する。

さて、この一文で注目されるのは、柳浪が小説を書くに至つた直接の動機は金を得ることにあつたことと、もう一つ、それが他人の勧めで、いわば受身の姿勢で為されたということである。

柳浪にとつては、小説を書くこと、即、金を得ることであつた。しかも、その後、売文が唯一のたつきの道となつたのである。

小説を書く以外に生計の道を知らなかつた作家の例は無数にあるし、また、食うために小説を書き始めた小説家も無数にある。しかし、多くの作家は、それが何であれ、内から彼をつき動かすものによつて小説を書き始めているのだ。柳浪にはそれがなかった。少なくとも、彼が小説を書き始める動機には、そのような内面の欲求は、直接、関与しなかつたといえる。そのうえ、おびただしい彼の作品の多くを占めている通俗的な作品にもまた、彼の内面とのつながりを発見はできない。在来の柳浪の著作年譜に多少の補足を加える意味も含めて、左に二十三年から二十五年にかけて新聞に連載された作品を掲げるが、このうち、○印を付したものの以外は、単なる物語

に過ぎないのである。

娘 雛 形〔東京中新聞〕23・6・1～6・29〕

○落 椿〔同紙〕23・7・16～8・24〕

瘦 鼠〔同紙〕23・8・26～9・3〕

絵 姿〔同紙〕23・9・21～11・3〕

水沢草紙〔同紙〕23・11・23～24・5・19〕

「五枚姿絵」と改題されたもの。

○煩 悩〔同紙〕23・10・7～10・14〕

宗 虎 丸〔同紙〕24・1・10～3・13〕

○おのが罪〔同紙〕24・5・14～7・17〕

金烏帽子〔同紙〕24・8・16～10・17〕

葉山物語〔中央新聞〕↑〔東京中新聞〕を改題〕24・12・4～25・3・25〕

隅田川伍仟〔同紙〕25・5・24～11・5〕

○家 と 児〔都新聞〕25・10・1～12・24〕

畜 生 塚〔同紙〕25・12・25～26・5・5〕

むろん、たとえば、「落椿」が調子が高くて読者に受けなかった（水蔭「自己中心明治文壇史」）というような新聞の続きものとしての性格から、通俗的になるのはやむを得まい。しかし、彼が金銭のためにむやみに小説を書きとばした姿は想像できる。それにしても、その処女作が金銭のためにのみ、他からの勧めで書かれたということは注目されてよい。前述の三文のどこを見ても、彼が小説を書かなければならなかった直接的な内からのつき上げは見当たらない。それはまた「女子参政廢中樓」の内容からもうかがえるのだ。

「女子参政廢中樓」は柳浪の語るような経過をたどって、明治二十年六月一日から同年八月十七日まで、六十回にわたって連載された。^(註)「明治文化全集」の解題には、同作品が「ともかく翌年にまたがつて、とう／＼稿を了つたのであるとのこと」とある。柳浪からの直話を記しているのだが、事実と相違している。柳浪の記憶違いであった。その後の年譜などにもこの誤りが踏襲されているので、この際、訂正しておきたい。「明治文壇の鬼才と称された」（宙外「明治文壇回顧録」）柳浪の、鬼才であったかどうかは別にして、その速筆ぶりを伝えるエピソードが数々伝わっているが、ほとんど準備らしい準備もなしに書き始められた処女作が、わずか三月足らずで完成されたことから、それは証明できるからである。

このようにして完成された「女子参政廢中樓」について、柳浪は次のように言う。

(1) 此小説も之と一般で如此出来事が出来様が出来まいが有が無らうが、女子に参政の権が有と